

〔第30回学術集会 シンポジウムⅠ〕

口唇口蓋裂をもつ子どもの親の夫婦間の強みを生かした 家族看護の方向性

九州大学大学院医学研究院保健学部門

植木 慎悟

口唇口蓋裂は小児において最も一般的な先天奇形である。この口唇口蓋裂をもつ小児の親は、特徴的な顔面奇形および口腔の機能障害に重大な心理的影響を受け、自責の念をもつが、誕生後すぐに哺乳の課題に直面し、段階的に行われる手術にも対応しなければならず、この困難な逆境を家族で乗り越える必要がある。多くの研究では母親を対象にしているが、家族を支援していくうえで、夫婦の強みを把握する必要があると考えた。今回報告する研究は、口唇口蓋裂をもつ小児の両親に焦点を当て、夫婦間の困難感とレジリエンスの違いを調べることを目的としている。両親を一単位とした本研究は今後夫婦の強みを活かした家族看護を実践していくうえで重要な知見をもつ。

口唇形成術後から12歳未満の口唇口蓋裂をもつ小児の両親を対象とし、定期外来通院時に質問紙を配布した。片親のみが来院の場合には、自宅に持ち帰って渡してもらうよう依頼した。質問紙には、口唇口蓋裂の親が抱く困難感として独自に作成した12項目（5点法）と、レジリエンス尺度を用いた。両親を一単位とした考えの下、夫婦間の各測定値を対応のあるt検定で比較した。235組の夫婦に配布した結果、64組から有効回答が得られた。困難感のすべての項目において母親のほうが父親よりも高く、特に有意差があった項目は「将来仕事や雇用に影響しないか心配」、「結婚や出産に影響しないか心配」、「病気は私のせいだと思う」、「子どもに申し訳

ないと思う」の4項目であった。また、レジリエンス尺度の下位尺度「問題解決能力」と「受け止め力」は母親より父親のほうが高い結果であった。これらの結果から、将来を心配したり自分を責める傾向にある母親には精神的フォローが必要であり、そして、事実を受け止め解決を求める父親には具体的なケアや治療の方法について説明することで、夫婦の傾向を活かした家族看護ができると示唆される。

本研究は計画当初から夫婦間を分析することが主たる目的ではなかった。しかし、様々な分析をする中で夫婦間の比較の解釈が可能なことに気づいた。夫婦は対となる存在であり、同じ方向へと進みつつもお互いの役割を持っている。看護師が親を支援する際、夫婦それぞれの特徴や傾向に合わせた支援ができればうまくその強みを発揮できるのではないと思われる。子どもの病気発覚をきっかけに家族の中で様々なバランスが崩れる。夫婦間の結束が強まる家族もあれば、離婚につながる家族もある。そうした家族の変調の時期に支援する際、個々の思いを偏聴することは重要だが、まだ誕生して間もない夫婦の場合はお互いの関係性や役割が定まっておらず、親としてどういった思いなのかを言語化し尊重し合うのは難しい場合がある。夫婦それぞれの特徴や傾向をあらかじめ知っておくことによって、看護師がそれぞれに合った支援の方向性を考える道しるべになる。